

「お前の民と聖なる都に対して、七十週が定められている。それが過ぎると逆らいは終わり、罪は封じられ、不義は償われる。とこしえの正義が到来し、幻と預言は封じられ、もっとも聖なる者に油が注がれる(ダニエル 9:24)」。

預言者の言葉は、謎めいた黙示的な表現が少なくない。とりわけダニエル書は、ほとんどが隠喩や寓喩で語られていて、訳が分からん、近づかんでおこう、となりがちだ。

元来「油注ぎ」は王の即位儀礼だが、この預言は世俗権力の話ではない。イエスが女の人から香油を注がれたこと(マタイ 26:7)なども「油注ぎの」謎めいた出来事だろう。

油ではなく水だったら洗礼か、とイエスの受洗を連想した(3:13)。思いとどまらせようとする洗礼者ヨハネ(3:14)に、イエスは「正しいことをすべておこなうのは～ふさわしい(3:15)」と答えた。「とこしえの正義が到来(ダニエル 9:24)」という預言と響き合うではないか。

「罪は封じられ、不義は償われる(9:24)」という預言もまた、ヨハネの「悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けている(マタイ 3:11)」という言葉と響き合う。

ウルトラ禁欲の洗礼者ヨハネ(3:4)がファリサイ人と異なるのは、「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに(3:14)」と己が罪を率直に述べていること。

こんなヨハネに崇敬されるイエスにも、悔い改めの洗礼が必要なのか。いや罪なきイエス(ヨハネ 3:5)に洗礼は必要ない。ではなぜイエスは、二の足踏むヨハネに、「今は、止めないでほしい(マタイ 3:15)」と洗礼を授けるよう強く迫ったのか。

イエスは罪人のただ中へ入って来る。御子が人となったクリスマス、「インマヌエル/神は我々と共におられる(1:23)」現実には、これほどまでに「共におられる」。イエスは私たちの中へずんずん入って来て、罪人たる「私」として、「私」に先んじて洗礼を受けた。

滲み出る己が罪に悔い改め(転換)続ける私の少し先を歩かれ、また私と並んで歩まれ、あるいは私を背負って下さっている。イエスが罪人のただ中へ入って来られ、まさしく「罪人となって」洗礼を受けられたことは、驚くべき愛による。

イエスが水から上がると天が開いて聖霊が降り(3:16)、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者(3:17)」と神は語った。これほどに愛し、御心に適う(喜びの対象)このイエスを、神はどうなさったか。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで永遠の命を得るためである(ヨハネ 3:16)」。新年礼拝で読んだこの御言葉を再び味わいたい。

「お与えになる」とはどういうことか。十字架で死に渡されることに他ならない。唯一の喜びの対象であり、愛する唯一の御子を失うことを承知で、神はイエスの受洗を然りとされた(マタイ 3:16)。

またイエスも、父の悲痛な愛を重々自覚しながら、「私という罪人として」悔い改めの洗礼を受けた。

私たちの洗礼にはとてつもない愛の犠牲が折り畳まれている。

先んじて受洗され、私の代わりに罪を負われたイエスの命を、この身に引き受ける。愛する喜びの対象(3:17)を失っても、私を何とか救おうとされる神の決意を、この心に引き受ける。それが洗礼だ。

まわりを見てほしい。あの人にも、この人にも、イエスの命と神の愛が宿っているではないか。だから人はすべてキリストのものなのだ。



《おまけのひとこと》

キリストの命 神の愛 これらを伝えて来たことで 聖書が生まれた だが人間が使う言葉に過ぎない 聖霊が 書の言葉とこの身を運ぶならば この身の基督がどこにあっても響きだすだろう